

2009年6月13日 事前講義

地域研究・開発援助事始ーインドネシアF S Cの目的と概要

岡本正明（京都大学東南アジア研究所）、島上宗子（京都大学地域研究統合情報センター／あいあいネット）

調査対象とする地域にとって外部者である調査者が対象地域に身を置き、当該社会とのインターアクションの中から問いを深めていくフィールドワークは、地域研究のみならず、開発援助に関わる際にも不可欠な行為といえる。インドネシア・フィールドスクールでは、以上の問題意識から、フィールドワークに必要とされる基本的な姿勢・作法・方法を、インドネシアの村落でのフィールドワーク実践を通して学ぶことを目的とした。講義では、そうしたフィールドスクールの目的を説明し、プログラムと日程について概説した。

村落でのフィールドワークは、インドネシア・バンテン州の国立ティルタヤサ大学およびNGOバンテン・インスティテュートの協力の下、ウジュン・クロン国立公園周辺に位置するタマン・ジャヤ村で実施することとした。フィールドワークでは、学生一人一人がタマン・ジャヤ村の世帯にそれぞれホームステイする形をとり、家族の一員として世帯の暮らしというミクロな視点から、村落社会をとらえるとともに、インドネシアの国立公園政策や地球環境問題などマクロな拡がりまで意識する視点を養うことを重視した。以上の狙いを説明したのち、具体的なプログラムの内容（ホームステイを通じた学生個人による参与観察、グループに分かれての村内踏査、国立公園事務所訪問見学、村人のグループ活動の見学、フィールドワークを通じた発見や学びを村人にフィードバックする報告会など）を概説した。

（記録：島上宗子）